

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

電力界の風雲児 才賀藤吉

才賀藤吉は電力界の風雲児であった。明治3年大阪に生まれ、同23年大阪電灯の技術見習を経て26年東京に出て三吉電機工場に入った。同社が京都電気鉄道の電車用モーターの納入に際し、派遣されて据付・補修に携わった。これが機縁となり、京都に電機製造・工事請負を行う才賀電機商会を開設、後に本社を大阪に移して事業を拡大した。明治35年ころから、電気事業、鉄道事業への機器納入・据付工事だけでなく、事業に出資して経営にも参画するようになった。才賀の関



才賀藤吉

連した事業は、豊州電鉄、伊予水力電気、日向水力電気、和歌山水力電気、王子電気軌道など60余社にのぼり、才賀の頭を叩くと電気の音がすると言われた。才賀は条件の厳しい地方の電気・電鉄事業を次々に手がけ、1つの事業が終わると、その投資資金(株式)を担保に次の事業を手がける方式だったので、日露戦後の不況で資金に行き詰まり、

大正3年、659万円の負債を抱えて倒産、翌4年不遇のうちに逝去(45歳)した。以下、中部地方で展開された才賀の事業を紹介する。

## 松阪水力電気 櫛田川に水力開発

松阪水力電気は明治30年ごろ計画され、地元水利組合と水利使用契約も交わしていたが、不況で資金が集まらず事業化できなかった。相談を受けた才賀藤吉は発電機その他諸機械の据付、隧道の掘削、需要家取付工事等一切を請負うことを条件に、資金の大部分を引き受け、明治36年12月会社創立の運びとなった。櫛田川の流れを利用する鋸形発電所(270kW)を建設して39年10月に開業、翌40年1月に社長に就任した。経営は順調で、44年には遠江電気(静岡県)、氷見電気(富山県)を合併して支社を置いたが、大正3年に才賀の事業が破綻し経営の実権は地元事業家に移った。

なお、才賀は「ガタ電」の愛称で親しまれた大石・大口間を結ぶ松阪軽便鉄道(大正元年8月開業)でも社長に就いている。



松阪水力電気 鋸形発電所

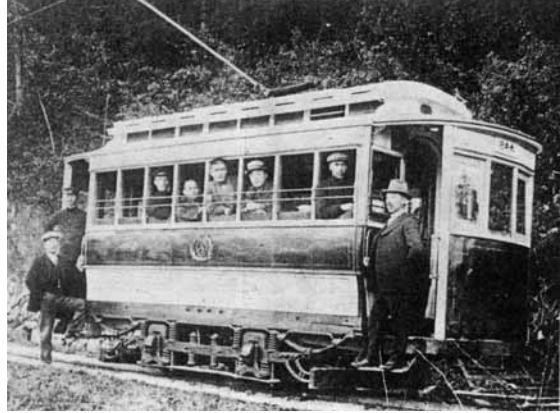
## 岩村電気軌道 電灯事業兼営で事業は軌道に

岩村電気軌道は東濃岩村町から大井町(いずれも現恵那市)までの12.3キロメートルを結ぶ岐阜県最初の電気軌道であった。岩村は恵那郡南部の中心地



浅見與一右衛門

であったが、国鉄中央線ルートから外れた同町の経済立て直しのため、地元名望家浅見與一右衛門が家財を傾けて進めた事業であった。岩村川沿いに道を拓き、鉄道を敷き、途中に小沢発電所(90kW)を設け、明治39年末に開業したものの、工事費が嵩んで経営的に行き詰まった。相談を受けた才賀藤吉は実地調査し、「電車数を増加し、

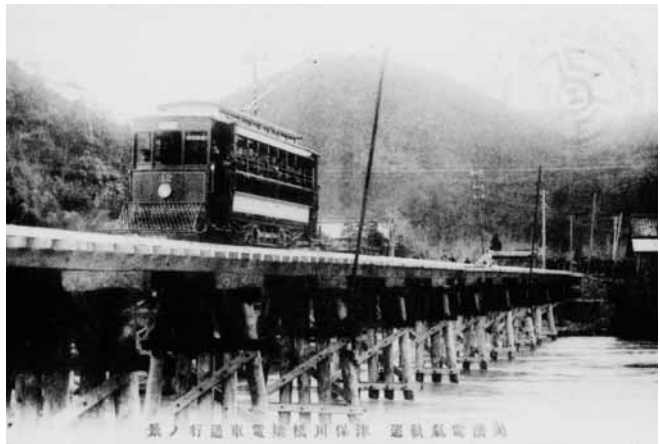


岩村電気軌道の電車

余れる水力を利用して電灯業を兼営」するよう懇諭し、かつ資金面・技術面での協力を約し、事業を軌道に乗せた(昭和9年廃止)。才賀は同社の取締役にも就任している。

## 美濃電気軌道 才賀藤吉の支援で事業化

美濃電気軌道は、岐阜市内線と岐阜・上有知(美濃町)間の1市2町を結ぶ美濃町線とをもつ岐阜県の中心的な電気鉄道であった。明治39年7月に創立発起され、同40年9月に軌道敷設の免許を得たものの、不況で資金が集まらず計画が頓挫しかけたが、才賀藤吉に話が持ち込まれ「電鉄所用の機械購入は勿論軌道敷設工事を自己の一手に受負う」ことを条件に出資(40%)に応じ、事業は軌道にのった。明治42年11月創立総会を開き、社長には才賀が就任し、44年2月に開通をみた(昭和5年名古屋電気鉄道と合併)。電車用電力は板取川



津保川橋梁電車運行中の美濃電気鉄道(名鉄資料館提供)

水力電気から購入した。また大正7年5月から美濃町線沿線の9ヶ村に電灯供給事業を兼営した。

(浅野伸一)